故人種的偏見が生ずるや。科學者の決議と宣言。(本文二六六頁、丸善扱、拾壹圓貳拾五錢)〔朝永陽二郎〕

タイ國地誌

能登志雄著

タイ國は今歴史的大轉換の眞中にある。變轉極りなき世界動亂のさなかにあつて、此の印度支那半島の中央に位する獨立國も今は世界史の大いなる流の波にゆすぶられて、新しき鼓動を期待しつゝも傳統の激しき苦惱にあへぎつゝある。過去僅か一年の間に於いて、日タイ友好條約の締結、吾國の調停による對佛印國境紛爭の解決、更に今回の日佛印間共同防衛の成立と皇軍の南部佛印進駐等、兩國間の眼まぐるしき程の事態の展開のうちに、今われわれ國民は最も深き關心をもつて此の國の立場を凝視しつゝある。

過ぐる滿洲事變の際に此の國のとりたる行動以來、われ〳〵は新なる認識をもつて此の國に接してきた。だが、爾來「日タイ親善」なる表現の持つ意義は安易なジヤーナリズムの報道によつて多分に皮相的な把握をもつたまゝ今日に及んでゐるおそれがあるのではないだらうか。單純なる親善の言葉の背後にはともかくも今日まで獨立を維持し來つた所以の一たる緩衝國的性格のあることを忘却してはいけない。

近時南方地域に關する著書の氾濫は全く驚嘆すべきものがある。タイ國に關してまたひとり其の例外たるを免れず、數多くの紹介、飜譯、解說書の續々と刊行せられるのをみる。然かしながら其等の多くは單なる旅行記、紹介の類であつて、なかには全く際物的出版物も少くはないようである。かゝる際に刊行せられたる本書の意義は如何なる點に存するであらうか。

先づ本書は現在までに公刊せられたる邦語によるタイ國關係文獻のうち最も地理學的に記述せられたる書であると明言することが出來る。吾々は邦文のタイ國關係文獻のうち、既に概說書としては東亞經濟調査局刊南洋叢書「シヤム篇」或は特殊研究として宮原義登氏著「タイ國に於ける華僑」更に歴史の方面では郡司喜一氏著「十七世紀に於ける日暹關係」等の極めて優れたる著書を擧げることが出來るが、地理學的と稱し得る記述の著書には今日まで接しなかつたものである。

だが、此の書のうちから著者の創意に滿ちた方法をもつた地誌の記載の多くを求むる人があればそれは失望に終るであらう。或はまた此の書のうちに著者のフィールドワークの體驗をとりいれた生々しき地誌の記載や數多くの文獻涉獵の結果による記述を期待するものも亦豫期に反するであらう。此の本は序文にも一寸記してある通り殆んどクレトナーの「暹羅」Wilhelm Credner: Siam, das Land der Tai, Stuttgart, 1935 に依るものである。クレトナーは現ミュンヘン大學教授、タイ國滯在數ケ年間の實地調査に加ふるに在來の文獻を涉獵して書きあげたのが此の書であつて、これはペンク教授鑑修の地誌叢書の一つである。「タイ國地誌」の原書とも言ふべきクレトナーの此の書は同書卷末のビブリ

オグラフィーに擧げられたる從來刊行の三百數十の文獻に比し、概括書として最も科學的に記述せられたる權威ある地理學的著書と稱し得る隨一のものである。此の書の出現以前にはグレイエムの「シヤム」W. Graham; Siam. 2vols, London, 1924 が比較的優れたる概說書であつたが、はじめて地理學者と云ひ得べき人の手になつたものとして此れは極めて重要なる意義を有するものと言ふことが出來る。

第一編地質構造及び地形はクレトナーの專門とするところ、隣接英佛の植民地、佛印、ビルマ、マレイに於いて夫々系統的な地質調査のすでに行はれてゐるに反し、從來特に缺除してゐたタイ國の地質學的知識に就いて著目すべき重要なる文獻と云ふことが出來る。以下第二編氣候と水量の變化、第三編生物、第四編民族と其の生活、第五編生產と其の景觀、第六編國家及び文化、第七編地方誌までクレトナーの完譯ではないが、目次は同樣であつて、比較的重要ならざる個所は省略してあるが重要なる部分は全部含まれ、それにグレイエム等からも多少採りいれてゐる。第四編に於いては印度支那半島の人文地理學的諸性質のうち最も著しき事實たる住民の雜多性に就て、複雜な人種の關係を、極めて變化に富んだ其の生活樣式をよく描寫して森林民族、山林民族、平原民族に大別して更に詳細に說明を與へており、第五編に於いては周知の此の國產業の大宗たる米作をはじめ、歐人資本の獨占によるチーク林業、錫鑛業及び近年著るしくその產額を增大し、屢々政治問題の對象となり、現在最も關心を持たれつゝある此の國植栽農業の唯一と云ふべきゴム業、さてはスティックラック生產の特殊產業等、最後の世界經濟に於けるタイ國の項に至るまで此の章は多くの頁を費して詳細に論ぜられてゐる。だが、英人の侵略、搾取飽くなき此の國產業を述ぶるに當つて、むしろ吾々としては齒がゆく思ふ程淡々と筆を運んでゐる。もつとも水運の項で第一次大戰前バーンコークの港を壓した獨逸船舶が今はすつかり姿を消し英船がそれに代つたことを感傷をもつて叙べてはゐるが。

たゞクレトナーの著書は一九三五年の發行でありその後六ケ年、而も激動の此の六年を經て新しく刊行せられたる本書がその間にあらはれたる資料をあまり採用してゐないのは遺憾であると思ふ。もつとも交通の項に於いてクレトナーに缺けたる航空の項が一頁半程載せられてはあるが此の航空の項にしても更に新なる事實が加へられてゐる筈である。又特に著とある以上もう少し多くの頁をさいて我が國の立場より眺めたる論評を與へられんことを望むのはひとり評者のみのことではないと思ふ。

現今南方に關する關心最高頂に達せる折なるもタイ國、佛印、蘭印等に關する科學的研究は遺憾ながら未だ其の緒に就いたばかりであつて夥しき邦語文獻も其の殆んどが飜譯、紹介、紀行の類を脫せざること前述の通りである。然しながらもう好い加減斯かる域を脫して科學的研究に基く著書の出現を期待してよいのではないかと思はれる。斯かる意味に於いても本書の刊行は誠に重要なる意義を有するものと言ふことが出來る。そして現在特に要望せられるのは我が日本の主體的立場より考察せられたる南方地域

の地政學的把握による著書の出現でなければならない。吾々は斯かる書の出現の一日も速かならんことを欲するものである。

挿入の地圖、寫眞等豐富、殆んどクレトナーより、一部はグレイエム等よりの轉載であるが何れも價値高きものである。

とにかく現在までに發行せられたる邦文のタイ國關係文獻のうち敢へて推賞に値するものと信ずる。たゞ著とあるもこれは譯著或ひは編著とした方が妥當ではないかと思ふ。（A5判四〇八頁、昭和十六年七月、古今書院發行、定價四圓）（藤野義明）

佛教考古學論叢

東京考古學會編

國史によると欽明天皇十三年に傳へられたといふ佛教は、當時の我等祖先の人々によつて比較的短期間に受容攝取され、爾後の國民の生活の内に深くも浸潤して行つたことは、既に明かな事實である。併し佛教は單なる精神文化として我が國人の精神生活の上に甚深な影響を與へたばかりではなかつた。佛に仕へてこれを供養するがためには、堂塔、佛像、法具等の備へをも必要とし、そこに物質文化の伴ふことは必然的であつたが故に、佛教の有形的文化は無形的文化に匹敵して、我が物質文化史の上に偉大な役割を展開してゐるのである。文化史上かゝる樞要な位置を占める佛教遺物が、佛教の精神史的研究とは別に、新たに學問の對象として取擧げらるべき價値を有することは、さまで喋々の論を要しないところであらう。既に學問的體系を整へつつある日本美術史、特に佛教美術史は、かやうな佛教遺物を研究對象とする、より早く現はれた學問の一つと見られるが、然もそれは美術史である故に、自らその對象物及び研究法に限界を生ずるものであり、縱横に廣い分野をもち、また佛教史上並に物質文化史上に特殊な意義を有する佛教遺物の究明には、なほ他の學問的部門の獨立を必要とするものであつた。佛教考古學なる一部門こそは、げにかゝる使命の達成を負ふところの學問に外ならないであらう。

從來、遺物研究を使命とする考古學が、文獻的徵證が皆無か、或はこれに庶幾くて、偏に遺物によつてのみ文化研究を可能とする史前、原史の時代に、主要な活動領域を置いてゐたのは、一應尤もなことではあるが、なほ歷史時代に至つても、その時代の遺物には文獻的研究の及び得ないもの、或は文獻とは離れて特殊な意義を有するものが存し、そこに考古學的研究法の適用され得る場合も自ら考へられるところである。かくして歷史考古學の獨立を可能とすれば、歷史時代の物質文化史上に既述の如き重要な位置をもつ佛教遺物の考古學的研究こそは、歷史考古學に於ける主流部門の一であるべきであり、漸くその緒に就いたこの學問の將來性は寔に洋々たるものが存するのである。

今般、舊東京考古學會が佛教考古學に關する論攷を集め「佛教考古學論叢」と題して世に公にしたことは、この新しい學問に對して我々の關心を喚起し、認識を深めるに足り、寔に時宜に適する所爲といへるであらう。收めるところは左の六篇、本文三百八頁に圖版多數を挿入した堂々たる體裁である。